

第5章 可能性 ⑱



生命誌絵巻(協力:団まりな、画:橋本律子)。発案した中村は「体あっての『脳とこころ』。その体は他の生きものと連続している」と話す

脳とこころ

御巢鷹に逝った科学者

飽くなき探究心やこれを支える技術の革新で、人間は脳の秘密に近づく。知の集積は人工知能(AI)に代表される新たな形となり、社会を変えてゆく。様相は科学全般に通じる。

人間を知る科学は重要だと受け止めつつ、今の科学のありようを問い直そうとする人がいる。

扇の形をした鮮やかな図がある。バクテリア、シイタケ、ヒマワリ、イルカに

扇の外から自然を見て、操

「多様性」と言いながら、天の左端にいます。ゴリラ。要から天にかけ、38億年前に産声を上げてから今に至るまで、地球上に現れたあらゆる生きものの代表例が描かれている。

「生命誌絵巻」。人間は「中から目線」。この目線

いのち見つめる科学を

年まで館長を務め、名誉館長になった今、ますます、その必要性を思う。

「た細胞できていて、とすることが分かった時代。ようやく、科学が生命を語れるようになった」

それまで人類学や心理学が扱ってきた人間も「生きもの」と受け止められた。

原点は半世紀前にある。東京大理学部化学科を卒業して理学博士号を取り、1971年に入った三菱化成生命科学研究所。遺伝学や生態学、神経科学と、さま

一方、高度成長のひずみは公害として顕在化し、海をはじめとした自然も「いのち」として捉え直されるよ

で、脳の研究もAIも進めてほしい」

さまざまな基礎研究を横断的にそろえた先駆的な場所だった。初代所長で戦後日本の生化学をけん引した江上不二夫は、ここで一つの言葉を生んだ。「生命科学」だ。

同じ頃、米国でできたのが「ライフサイエンス」。国民生活の向上を目指した米政権が「がんの制圧」を掲げる過程で、医学や生物学を包括する概念として作り出されたという。

「あなたも私も、アリもスズメもタンポポも、38億年の歴史の中で生きている。つながり、広がっている。そうした考え方を「生命誌」と名付けた中村が、大阪府高槻市にJT生命誌研究館を立ち上げたのが1993年。2002年から20

自らはDNAを研究していた中村は振り返る。

「遺伝子やDNAが理解されて、植物も動物も、全ての生きものはDNAが入

「生命誌絵巻」

「生命誌絵巻」

「生命誌絵巻」

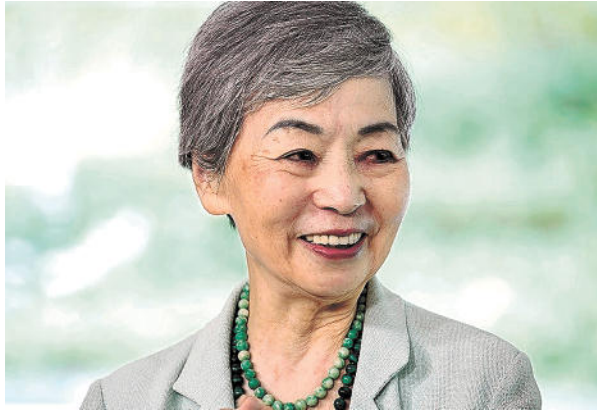
中村は語る。「日本の生命科学は結局、米国のライフサイエンスと、同じ方向へ行ってしまった」

米国型のライフサイエンスは「医学の科学技術化であり、技術開発が第一」。技術を否定するつもりは毛頭ない。がんが治れば素晴らしい。でも、と中村。「なぜ、異常気象は続くのか。感染症のパンデミック(大流行)は起こるのか。21世紀に戦争はなくなるのか」

根底には、競争を最優先する新自由主義と金融資本主義があると感じている。「この二つの主義は『いのち』と合いません」。機械論から生命論に変わろうというものが、生命科学の本質だったという。

生命科学にゲノム(全遺伝情報)という視点を取り入れ、「いのち」を見つめ直した先にあったのが「生命誌」だった。(敬称略)

第5章 可能性 ⑮



「これからの地球は心配していません。38億年続いてきた生き物は必ずこの先もある。心配なのは人間。人間は生命誌の中にいることを忘れないように」と話す中村

脳とこころ

御巢鷹に逝った科学者

中村桂子(87) || J-T生命誌研究館名誉館長 || は1985年8月12日、日航機墜落事故の一報を友人とテレビで見た。

その前日、「生命誌」立ち上げの相談のため、飛行機で大阪入りした。身震いしたのを覚えている。

脳については事あるごとに伊藤正男に教えを請うた

ものの、塚原仲晃なかあきを直接知るわけではない。ただ、と力を込めた。

「可塑性はすごい、と思った」
例えば、遺伝子が分かれ

「何でも理解できると捉えるような考え方。科学は決定的論。これがあれば、こうでしよ、みたいな。ずれていたら気持ちが悪い。生きもの

可塑性あつての生き物

とか、脳を相手にしてもそう。今もその傾向が強いけれど、当時の科学はほとんどがそんな考え方だった」

一方で塚原が探究し、代名詞となったシナプス(神経細胞の結合部分)の可塑性は、脳が環境や状況に応じて柔軟に変化するということだった。急逝から40年近く、常識になった。

数々の著書、メディアや講演を介しての情報発信。生命誌研究者として積極的に論じ続ける中村が今、「おかしい」とするものがある。ウクライナ侵攻だ。スパンテ・ペーボ(20

「当時は否定的な意見も多かったでしょうけれど、一流の研究をベースに、信念を持って主張した。それも脇にいる人じゃなく、ど真ん中にいた科学者が」。

可塑性は、現代では生命科学を考える際も基本だとして上で、中村は言う。

「可塑性って好きですね。22年にノーベル賞)がDNAで現生人類とネアンデルタール人の関係性を解き明かす時代、科学的に「80億人の人類に共通のルーツがあることが分かっていた」。理解が及ばなかった時ならいざ知らず、この期に及んでなぜ戦争ができるのか。「しかも使われる武

生き物は可塑性あつてのものです」

器類は、全て科学が生み出した」

中村は心からの願いだとして語る。

「科学は役立つものであれと言いつつ、ここでは人間についての科学が役立つていない。科学者が戦争の無意味さを語る責任のある時代になったと思う」
主張の礎にあるのは実体

験に他ならない。小学4年の盛夏、玉音放送が流れた。昨日までは「天皇陛下からいただいた、汚したらものすごく叱られた教科書を、黒塗りにしなさい」と言われた。「戦争と世の中ががらりと変わった民主主義とを、体験した世代です」

視線はまた、現代全般を見つめる。「今の社会は、全部を一直線に並べての競争。そうさせるのが新自由主義で、支えるのが金融資本主義。でもね、と中村。「アリとライオンを比べて、どっちが上って言ったって、意味はないでしょう」
家族がいて仲間があり、日本人がいて人類、生き物地球がある。「そんな『私たちの私』として考え直しませんか。中村は呼びかける。
(敬称略)